

【俳句部門】

▽最優秀賞

原爆忌褪せた鍵盤弾く少女

熊本2年 佐藤 璃奈

【評】原爆忌も、少女の弾くピアノも、すべてが色褪せて、なぜかさびしい。戦後75年の歳月が、そうさせたのだろうか。かつては「ふたたび許すまじ原爆を！」の歌があったというが、その薄れた時勢をうまく衝いた作品である。(星永)

▽優秀賞

課題解く雪山に迷い込むように

熊本信愛女学院2年 下城 光来

【評】難しい課題に取り組む困難と真剣さを、一寸先も見えない「雪山に迷い込むよう」だと直感したとえたとともに、力があります。これは高校生らしい学習の体験ですが、同時に誰にとっても深く共感できる体験です。(岩岡)

夏の風龍神が跳ぶ緑の田

阿蘇中央1年 友枝 瑠星

【評】風吹く夏空を、なだらかにではなく、八重雲を掻き分けるように跳ぶ龍神、そのダイナミックな登場がいい。それが緑の稲田に恵みの雨をもたらすのだ。吉兆の喜びに沸く村人の喚声も聞こえてくるようで。(星永)

炎天下自転車サドル鉄板焼き

球磨工2年 村上 大斗

【評】「炎天下」の「自転車のサドル」が「鉄板焼き」みたいだと、これはとんでもなく熱そう。「ジリジリ」を超えた「ジュージュー」で、強烈。身を焼くような「炎天下」の暑さで、これはいわば「身体性」の俳句で、成功しています。(岩岡)

風鈴の音が私の子守唄

球磨中央3年 荒川 鈴

【評】「風鈴の音が私わたくしの子守唄」と読みたい。チリンと鳴る風鈴のやさしい〈音〉がいとも胸にあって、それによって〈私〉は育てられたのだという。この句の核にあるその人のやさしさも、きつとその所為せいであろう。(星永)

ラムネ瓶二次関数を濡らしてる

熊本2年 川越 理央

【評】「二次関数」と格闘している作者。かたわらの「ラムネ瓶」からは水がにじみ出てひろがっていく。作者の焦りを「ラムネ瓶」の水滴で表現したところが、みごと。(岩岡)

▽入選

長尾奏明(阿蘇中央1年) / 赤池星奈(球磨中央1年) / 倉岡皇至(熊本3年) / 高橋マ
イ(尚綱3年) / 牧綾香(熊本信愛女学院2年)

▽努力賞

内園隆仁(芦北3年) / 岡野聖世(阿蘇中央1年) / 本田航平(大津1年) / 税所紫音(球
磨中央1年) / 佐藤羽哉斗(熊本工2年) / 永田美月(城北1年) / 川内彩寧(熊本信愛

女学院2年) / 福岡拓也 (文徳3年) / 宮本響太 (御船1年) / 芳賀心音 (玉名工1年)

【総評】今年もたくさん、しかも多様な俳句をありがとうございます。選考に当たっても選者それぞれの個性が、投句された皆さんの個性と響きあって、多様な秀句を選ぶことができたことをよろこんでおります。

たとえば最優秀作品の〈原爆忌〉の句のように、今年は戦後75年の節目、小さな「鍵盤」を通して正面から原爆忌に取り組んだ姿勢も、また優秀作品の〈課題解く〉の句のように、高校生の日常の哀歓をしっかりと詠んだ句もみごとです。どの句も、日常の小さなできごとへの〈小さなものへのまなざし〉を通して、自分の感動を率直に表現された句ばかりです。私たちは、私たちの〈まなざし〉とその感動を伝える「ことば」(詩)を通して、時代や隣人とながら未来をつくっていくのです。どうか俳句という詩の可能性を信じて、ことばを大切に、そして「俳諧自由」といわれるようにのびのびと日々の感動を詠み続けてください。(岩岡)

本年も応募数が増えて、2591点、最高の数という。この会への関心が、それほど高まったのはうれしい。

けれども質の点では、いまいちさびしい。句材が相変わらず「蟬・花火・夕暮れ・ひまわり・夏祭」等で、叙法も「やかまし・美し・寂し・明るし・懐かし」の感想程度で終わっていて、もの足りない。なぜそう感じたか、自らの心に問うて、そこに浮かんだもの(詩心)を詠んでほしい。今後のために、ここで改めてお願いしておく。

なお今回、例年になかった新たな傾向が見えたのは良かった。これまでわが身の廻りばかりで済ませていた視点が、社会や時代に拡がったことである。戦後75年を機に戦争や平和を考えたものやコロナ禍の現状を憂えたもの等が数多く寄せられたことは、青年の新たな主張(うた)として頼もしい限りである。これからもさまざまな象かたちの自分を句にして、自己確立に努めてください。(星永)

【短歌部門】

▽最優秀賞

早朝の目覚ましの音ペンの音姉はもうすぐ県外に行く

熊本学園大付属2年 東 玲雅菜

【評】作者は姉と一緒にの部屋に寝ているのでしよう。夜明け間近のとき、姉は決まった時刻に起き、机に向かってせつせとペンを走らせているのです。きつと受験勉強なのでしよう。下の句の「姉はもうすぐ県外に行く」の措辞が、声援の気持ちのなかで一抹の寂しさをも感じながら、邪魔をしないように目をつぶっている作者の姿が見えて、何とも愛らしい。(塚本)

▽優秀賞

小説がいろんな場所へ連れていく眠りへ入る前のひととき

球磨中央2年 岡乃 麻衣

【評】就寝前のひとときを読書に充てている作者。中でも小説がお気に入りらしい。それは作品がいろんな場所に連れて行ってくれるから。小説から始めたことも成功し、歌のり

ズムが整っている秀歌。(橋元)

思い出は美化するものと知りながら踏み出せずいる十六の夏

熊本マリスト学園1年 宅島 汐美

【評】いかにも若々しい感性をうまく表現し、思春期の思いが印象的にうたわれています。

「思い出は美化するもの」とは大人びた思いながら、「踏み出せずいる」確かに今という時間を自覚、客観視しているところが魅力的です。(塚本)

水害で電車が使えずバス通へ外のけしきが違って見えた

芦北3年 森本 亜弥華

【評】水害で列車が不通になりバスで通学している。列車からの景色とは別の景色だが水害の影響による変化もあることだろう。言外に不便になったことへの不満もありそう。

(橋元)

楽しみに作った浴衣お気に入り糸つけたまま夏を持ち越す

熊本信愛女学院3年 高橋 七紬子

【評】楽しみながら作った浴衣。気にいったけれど、この夏は着ていくところがなくてとうとう着れなかった。「糸付けたまま」は「しつけ糸」を外さなかったこと。コロナ禍の影響を言外に感じさせる。(橋元)

液晶のその先だけにいる君に会えたらいいが距離はそのまま

濟々巒2年 吉野 美羽

【評】新型コロナウィルスの流行のなか、リモート授業がおこなわれたようですが、遠隔授業は画面を通して級友の顔、特にほのかな思いを寄せる人の顔は安心して見られるもの、何かしらもどかしいのでしょうか。「距離はそのまま」という結句にその気持ちがよく出ています。(塚本)

▽入選

児玉愛莉紗(尚綱2年)／松下美紅(球磨中央2年)／耕琉偉(城北3年)／白井夢来(尚綱2年)／久野翔矢(玉名工2年)

▽努力賞

志垣欧典(熊本工2年)／阿南康平(ひのくに高等支援2年)／千蔵清策(荒尾支援高等部3年)／槇原実加子(熊本学園大付属2年)／山口幸保(芦北3年)

【総評】作品のレベルが上がり、学校生活だけでない多様な場面を題材にした作品が見られた。中でも、コロナ禍や水害など自らが体験した出来事を捉えた作品があったことにも感心した。また、風景を真正面から捉えた作品や自分の言葉で思いを述べた作品もいくつもあり、短歌を作る喜びが感じられた作品があったことはここ数年の大変な進歩であると確信した。そういうこともあって上位の作品は甲乙つけがたく審査には苦労した。

このコンクールも20年近くになる。先生から言われて仕方なく作るのではなく、自ら楽しんで作る作品が応募作品の主流になることを願っている。(橋元)

【自由詩部門】

▽最優秀賞

「言葉」

美しい布を織り成すように、
流れる音楽を生み出すように、
私は言葉を紡ぎたい

川のせせらぎ
草原を吹き抜ける風
滴り落ちる雫
そんなふう
心地よい言葉を紡ぎたい

悩んでいる友だちの心を
明るく軽くできる
やわらかな言葉
落ちこんでいる友達のことを
慰め癒すことができる
あたたかい言葉

自分を成す言葉
美しい 流れるような言葉を紡げば
きっと美しい清らかな心を育てられるだろう

人吉1年 杉本 怜

【評】平易な言葉と表現を用いながら、人間にとって、そして詩人にとって一番大切な言葉に対する自らの覚悟が詩に形象化されています。特に、最後の3行は哲学的な深みを有する洞察でありながら、同時に美しい詩でもありえています。

▽優秀賞

「あお」

薄浅黄
朝焼けの空に混ざるあお
瞬きの間に消えてしまう色

勿忘草
緑をささやかに彩るあお
言葉にたがわぬ秘めやかな熱の色

紺碧
入道雲が湧いている日の空のあお
空の高さを突きつける色

次縹

紫陽花を滑る水滴のあお
薄暗い中でも鮮やかさを誇る色

花紺青

星を宿した空のあお
等しく眠りを誘う色

群青

触れられない沖の海のあお
泡を溶かして深くなる色

美しいあお色に

溶けてしまいたいと

幾度幾度と願いながら

美しいあお色の中で

あなたに好きだといえなかった日の空の色を
ずっと

探している

濟々巒3年

荒木 よしの

【評】観察力と表現力が際立った作品です。様々な青をきちんとデッサンできているのも素晴らしい。技術的にしっかりした書き手になりつつあるが、惜しむらくは終わりの2行がほんの少し甘い。

「いつもと同じ、朝」

いつもと同じ朝、

ジョンは目覚める。母が自分を呼ぶ声で

サリーは目覚める。母が自分を呼ぶ声で

いつもと同じ朝、

ジョンは口をすすぐ。透明な水で

サリーは口をすすぐ。油の浮いた水で

いつもと同じ朝、

ジョンは詰める。教科書とノートとペンを

サリーは詰める。カカオの実とコーヒー豆を

いつもと同じ朝、

ジョンは歩く。コンクリートの道を

サリーは歩く。茶色くぬかるんだ道を

いつもと同じ朝、
ジョンは聞いた。学校のチャイムを
サリーは聞いた。銃声を

いつもと同じ朝、
ジョンは走る。
サリーは走る。

近づいていく。近づいていく。近づいていく。
近づいてくる。近づいてくる。近づいて――。

いつもと同じ、朝。

人吉1年 吉川 涼々

【評】詩の完成度としてはこの作品が一番優れています。ジョンとサリーの描写が次第に緊迫を孕み意外な展開を見せつつ終わります。特に「近づいていく」と「近づいてくる」の対比は見事。でも、もう少し書き込んでほしい。

「心」

とどいてほしくて とどかない
気付いてほしくて 気付かない
いかないでと 呼び止めず
ただただ 一人の帰り道

頼ってほしくて 頼らない
笑ってほしくて 笑わない
傷つかないでと 願っても
一つの心は 二つに割れて
二つの心は 四つに割れる

泣きたくて 泣けなくて
吐き出したくて 泣き出せなくて
長い旅路で僕は一人

人吉1年 和田 幸晟

【評】心というものの危うさとはかなさ。そのデリケートな心同士が理解し合うことの難しさを巧みに表現できています。最後の一人の旅路への覚悟はどこかきっぱりとしています。

「無題」

七月四日朝七時

外は球磨川が暴れていた

波がおしよせて
檻をのりこえて
町をのみこんだ

好きだった町は
毎日通った道は
色々買った店は
平穩だった日々は

――一変した

七月二十日午後七時
双子の虹がかかった

「希望の虹だ」と誰かは言った
「励ましの虹だ」と誰かは言った

二つとも雨のせいなのに
二つとも雨のおかげなのに

人は自分勝手に
自然も自分勝手だ

人吉1年 原口 蒼生

【評】7月4日の暴流と、7月20日の虹を対照的に歌い分けています。「二つとも雨のせいなのに」の繰り返しが効いています。最後の「自然は自分勝手だ」は一考の余地は残る。

「手紙」

きみへ

僕はきみのそばにいる

いつから一緒なんだろう
僕らはずっと一緒にいるよね

僕はきみを苦しめる

ときにはきみが僕を消そうとがんばって
泣いてしまったこともあったよね

僕はきみを大人にさせる

僕が一つ消えるたび

きみは大きく成長する

これからも僕はきみのそばにいる

きみが困難に出会うたび僕は生まれる

一緒に乗り込めようね

一生の親友 悩みより

人吉1年 蓑田 彩夏

【評】わかりやすい表現で普遍的なテーマを歌っています。最後まで読み進むうちに手紙の正体がわかります。言い古された教訓に終わりがちなことが「一生の親友 悩みより」により詩として胸に届きます。

▽入選

山田京佳（人吉1年）／富丸菜月（熊本学園大付属2年）／牛島啓志（ひのくに高等支援2年）／吉川温人（人吉1年）／田浦実優（球磨工1年）

▽努力賞

西季三葉（人吉1年）／土田楓士（盲学校1年）／川原美桜（人吉1年）／中村くるみ（球磨工1年）／恒松葵（人吉1年）

【総評】高校生の詩を読む作業は、私にとって驚きに満ちた体験でした。自然に自分の青年期の感覚や記憶を呼び起こすことになり、いつの間にか若返ったような気がしました。読むうちに私の好きな詩人リルケが、若き詩人に送った手紙の一節が浮かんできました。青年に作品の批評を請われたリルケは、芸術作品の批評ほど無意味なものはないと断り、次のように言います。「あなたの夜のもつとも静かな時間に、私は書かずにはいられないのか、と御自分に問うてごらんなさい」「芸術作品はそれが必然から生まれたものならば、よいものです」（中村ちよ訳）。自分の表現の中に命の底から生まれる必然性や内発性があれば、私の選評などに一喜一憂することはありません。最優秀賞、優秀賞はいずれも素敵な作品でした。でも、入選や努力賞、その他の数多くの作品にも私は未来の詩人たちの誕生を予感できました。みなさんが、ずっと書き続けられれば私の予言は真実になるでしょう。（内田）

【肥後狂句部門】

▽最優秀賞

コロナのせいで 一億人のかくれんぼ

城北3年 八木田 絃音

【評】今年は新型コロナウイルスの影響で、全国的に自粛ムードが広がった。個人的な付き合いも、各種イベントも中止になったりして、引きこもり状態になった。こんな様子をかくれ

んぼに例えた発想が面白い。

▽優秀賞

良か先輩 存在感が半端ない

球磨工1年 土肥 勁心

【評】すごい魅力的な、人間味のある先輩なんだろう。「半端ない」という言葉がそれを証明している。

良か先輩 菊池川より深い人

玉名2年 松田 侑馬

【評】菊池川流域は日本遺産に認定されたように県北の人たちにとっては恵み多い、母なる川だ。そんな菊池川に例えられる先輩はさぞ懐の深い人だろう。

良か先輩 口で語らず背で語る

黒石原支援2年 原田 凜太郎

【評】言葉で教えるのではなく、背中教える。口数は少ないが、かつこいい男のイメージがわいてくる。

ありのまま 包み隠さず素でいたい

文徳1年 嶋崎 愛茉

【評】自分自身にも、他人にもありのままの素の自分でありたい。これができればすごいことだが、貫くのは難しい。

コロナのせいで つば飛ばんごつ孤食する

盲学校3年 吉岡 夏輝

【評】新型コロナの感染ルートの一つに飛沫感染がある。他者への思いやりが伝わって来る。

▽入選

市岡海音（球磨中央3年）／森山源氣（高森3年）／増田陽碧（御船2年）／内園隆仁（芦北3年）／平山新竜（玉名工1年）

▽努力賞

田中里奈（湧心館定時制1年）／宮原心琉（大津1年）／上杉優斗（熊本工2年）／木實慈（阿蘇中央1年）／高橋七紬子（熊本信愛女学院3年）／池田凜（ひのくに高等支援2年）／椎葉七海（黒石原支援3年）／辻大志（熊本学園大付属2年）

【総評】肥後狂句は、熊本の風土の中で生まれ、育った独特の短文芸です。世相風刺、人情の機微を詠むのが特徴で、熊本弁も自由に使えます。川柳など他の短文芸と基本的に違うのは笠付けの短文芸であるという点です。笠付けというのは、出されたお題（肥後狂句では笠という）を頭に置いて十二音で付け句するやり方です。付け句は七五調が基本です。わずか十二音という制約された中での作句は難しい面もありますが、どう省略するかポイントで、面白みでもあります。

今回の応募は2358句。昨年より500句近く増えました。ありがたい限りです。字

余りや、笠と付け句の中身が合わない笠外れの句もありましたが、若者らしい新鮮な観察眼、はつらつとした発想もあり、興味深く選をさせていただきました。若い皆さんの中から将来肥後狂句に関心を持っていただく人が出てくれることを願ってやみません。(野方)